

彙報

人 事

外国語外国文学講座講師木村宇一氏は昭和三十六年二月一日付を以って助教に任ぜられた。

社会科学講座助教西本嘉雄氏は昭和三十六年四月十日付を以って教授に任ぜられた。

外国語外国文学講座助教中村善也氏は、昭和三十四年九月より、ローマ大学西洋古典文学教室において、古代ギリシャ・ローマ劇を研究していたが、ほぼ二カ年の留学を終えて、昭和三十六年五月末日に帰学した。

研究報告

著 書

単 行

- | | | | |
|------------|------|----------|-----------|
| 白氏文集の批判的研究 | 花房英樹 | A5・七八〇頁 | 中村印刷出版部 |
| 「元白唱和集」稿 | 花房英樹 | B5・一一六頁 | 府立大学中文研究室 |
| 部落問題と同和教育 | 西元宗助 | B5・二一五頁 | 創文社 |
| 共 著 | | 昭和三五・一〇〇 | |

現代のことば 寿岳章子 樺島忠夫その他一名(昭和三五・一〇〇) 三一書房

機業兼業農村における農業経済の分析

- | | |
|-----------|-------------|
| 西本嘉雄ほか一名 | 京大農業簿記研究調査所 |
| (昭和三五・二〇) | |
| 坂田一ほか数名 | 福村書店 |
| (昭和三五・六〇) | |
| 武田昌一ほか一名 | 郁文堂 |
| (昭和三五・七〇) | |

彙 報

翻 訳 (単行)

デュレンマット「約束」

前川道介 新書版一四〇頁 (昭和三五・一〇〇) 早川書店

(共 訳)

トーマス・ハーディ「テス」上下

石田英二 文庫本・六九五頁 ほか一名(昭和三五・一〇〇) 岩波書店

論 文

表記の研究(一)・(二)

樺島忠夫 計量国語学一五・一六号

事務の機械とパラグラフシステム

樺島忠夫 言語生活三六ノ五号

ヴィンケルマンの死

前川道介 架橋六号

ホフマンとポーランド

前川道介 架橋七号

シュナーベル「航海体験の精神記録」について

木村宇一 架橋六号

作者が作中人物に移り移ることについて

武田昌一 架橋七号

大東急記 念文庫蔵 旧鈔本白氏文集

花房英樹 大東急かがみ四号

元稹索引簡編(一)

花房英樹 府立大学中文報告七

長恨歌・琵琶行・白氏文集

花房英樹 世界名著辞典四・五巻

唐詩選・白氏長慶集

花房英樹 フジエ歴史事典七巻

青少年問題

西元宗助 近代仏教講座五巻

道徳的判断はいかに道徳実践をささえるか

坂田 一 教育心理学九ノ一号

ハーグ陸戦規則と原油の押収

竹本正幸 国際法外交雑誌九ノ五号

ペイホー号事件

竹本正幸 法学論叢六九ノ二号

領事関係と免除(一)

竹本正幸 法学論叢六九ノ四号

抄物の語彙研究の意義と方法(共執)

寿岳章子 国語学四五号 樺島忠夫

シュナーベル「移住する人たち」(翻訳)

木村宇一 架橋七号

学会発表

絵画における制作者と社会の関係 野口栄子 京大美学会三五・七

抄物二本間の関係 寿岳章子 計量国語学会三五・一一

文脈について 樺島忠夫 府大国語国文学会三五・二

青年の道徳性 坂田 一 日本応用心理学会三五・一〇

集団討議による判断力の汎化 坂田 一 日本教育心理学会三五・一一

青年の道徳意識とその実践性 坂田 一 関西教育学会三六・二

京都府における農業経営・技術改良と生活改善普及の概況

長谷川昭彦 関西社会学会三六・五

研究誌

府立大学国語国文学会誌二号 国語国文学会 昭和三五・一〇・一

研究会

全国国語学会

昭和三十五年十月三十日、本学本部講堂において、京都大学教授遠藤嘉基氏の「ドイツにおける日本語学」という講演を始めとして、長時間にわたる活潑なシンポジウムが続き、盛会裏に終った。

府立大学学術講演会

昭和三十六年四月、学術講演会委員会が結成され、内規を制定し、各学部教授会の承認を経て、年度内の運営を企劃し、五月二十五日、午後一時二十分より、下鴨第一合同教室において第一回を開催し、人文部会として浅田善二郎、花房英

樹、坂田一、小田丙午郎の四委員が事を担当した。講演者、演題及び内容は次の通りである。

現代英文学に於ける晦渋性に就いて

吉田 弘 美

西欧に於ける最も大きな衰退期と考えられるものはギリシャ末期即ち紀元前三世紀のアレクサンドリア時代のそれ、十八世紀古典主義末期のそれ、而してロマン主義末期、即ち現代のそれであろう。

而して若し此等の中に衰退期特有の現象、即ち共通の現われを示す事を求められるならば次の様になるであろう。

第一に文学芸術が晦渋、難解になる。第二に各芸術が己れの領域を越えて他芸術を侵犯する様になる。

我々は James Joyce の “Ulysses” の中に右の諸々なる現象を発見する事が出来る。

“Ulysses” が其の「芸術性」にも拘わらず此等の特色を持っているのは、其れが「人間的なるもの」「生活的なるもの」を売って其の「芸術性」があがないとられている事によると思われる。根本的には世界に対する対し方に頹廢性のよってきたる所以があると考えられる。

我々は晦渋、難解を偉大、高邁と同一視する愚を犯すべきでは無い。文学は且って偉大なる芸術と常に共にあった単純性、明快性をとり戻すべきであると考えられる。

ランボオの O saisons, ô châteaux にいつ

小田良弼

ランボオの O saisons, ô châteaux ではじまる無題の詩は、ランボオが到達した究極の世界を簡潔な形でうたいあげたものとして、極めて重要な意味をもつものと考へられる。

ランボオの世界に対する解釈は人により異なるが、私はつぎの様に理解している。キリスト教的ではなかったけれど、やはり典型的な一人の宗教詩人であった。絶対真理の探究、それが、彼がすむ十九世紀フランスの世界、ヨーロッパ的文化の世界、さらには自己を含む一切の人間否定を喚起する。一切合財に対する激しい徹底的否定行が演ぜられた所以である。そこに死の世界が、ennuiの世界が展開せられる。そこに憩いを見出した一時期もあった (Cf. Les Sœurs de Charité) が、さらにその否定的超克に絶対肯定的な立場が展開せられてきたのである。innocenceの世界であった。それがランボオにおける Néant (無)を行ずる Natureの世界であったのであり、それがまた同時にランボオの神の世界であり、したがってまた amour divin の行ぜられる世界でもあったのである。

かくて、ランボオの世界はこの現実を足据えて——その現実が vicieuxなものであり、épineuxであらうとも、再びそこからの逃避はゆるされない——一歩一歩の一事一事に即して神の現成を行くべき世界であった。そこにランボオの Bonheurの世界があったのである。それが絶対真理の世界として、一切存在の根拠として「誰しもが逃れ得ない」、fatalité としつつの Bonheur (Cf. Déires, II.) だったのである。

またかかる絶対真理を行くところにこそ、真に詩の世界があったのである。「彼は行動の韻律化にあるのではなくして先駆するもの」であった、とはか

かる意味で言っているのである。

かかる絶対肯定的立場においてこそ、O saisons, ô châteaux / Quelle âme est sans défauts? という得たわけであり、その一歩一歩の saisons が châteaux が神の現成であり、また詩の世界であったのである。

昭和三十六年三月卒業論文

岩 本 喜 美 子	伸子における自我意識をめぐって
奥 野 惇 子	西鶴と京都
片 岡 美 代 子	独歩と自然
桐 田 美 代	心中宵庚申の位置
塩 見 駿 一	平家物語対話文における阪東語 言語とイメージー谷崎潤一郎ー
滝 野 明	宮沢賢治の童話について
竹 村 昌 子	夏目漱石
辻 分 宏 夫	文学について
中 尾 仁 一	社会的背景からみた今昔物語
林 寛 治	狂言にみられるあいさし語
福 島 美 佐 子	動詞の語尾について
藤 田 伊 之 助	樋口一葉の一考察
山 岡 重 子	詩人の眼ー太宰治斗考
吉 川 征 夫	チャップリンーその存在論的考察
上 田 年 美	東洋画における線の抽象性
岡 野 繁 子	

Akiko Iguchi : Henry Fielding and the World of "Tom Jones"
 Hideko Itô : A Study of Pearl Buck's *The Good Earth*
 Haruko Ueda : W. S. Maugham and his Popularity
 Yôko Usui : Graham Greene and his Film Treatment
 Mitsué Ono : A Study of Thomas Hardy's "Tess of the D'Urbervilles"

Sachié Kitada : A Study of "My Antonia"
 Ryôko Kitanaka : A Study of Willa Gather in "O Pioneers!"
 Yûko Kinjô : A Study of "A Farewell to Arms"
 Yatarô Kojima : A Study of John Galsworthy as a Dramatist
 Saéko Kobayashi : A Study of Virginia Woolf through "To the Lighthouse"
 Yoshié Shibata : A Study of John Steinbeck's "The Grapes of Wrath"
 Tomoko Takahashi : A Study of "Jane Eyre"
 Akino Takenaka : A Study of J. Austen's "Pride and Prejudice"
 Momoko Nakanishi : A Study of "The Scarlet Letter"
 Yoshiko Nakamura : A Meaning of Passion in "Wuthering Heights"
 Toyoshi Nishikawa : R. L. Stevenson and his "Treasure Island"
 Takeshi Hashimoto : A Study of Samuel Butler
 Sumiko Hirano : A Study of Joseph Conrad's "Lord Jim"
 Kiyoshi Fujitani : A Study of Keats' *Ode to Autumn*
 Masako Horii : The Love Ethic in "Women in Love"
 Tomiko Hontani : Virginia Woolf's "Mrs. Dalloway"
 Tamami Maruyama : A Study of Stephen Crane, chiefly in "The Red Badge of Courage"
 Chizuko Morita : A Study of W. S. Maugham, His Spiritual History
 Kazuko Morimiya : A Study of Aldous Huxley's "Eyeless in Gaza"
 Osamu Kamiya : On E. M. Forster